学芸員のはなし 95

博物館周辺で見られる冬鳥の紹介

冬鳥とは日本より北の地方で繁殖し、秋以降になると、北方のきびしい寒さをのがれるために日本に渡って来て、冬を過ごす鳥のことをいいます。春（3月末から4月頃）になると、ふたたび北の地方へ帰って行きます。

博物館と国道58号に挟まれた内海にも毎年、冬の時期になると決まってやって来る種類の野鳥がいます。特に干潮の時間帯に合わせて、エサとなる小魚や甲殻類を捕りにやって来るため、タイミングが合えばいつでも手軽に観察することができます。

アオサギ（ペリカン目サギ科）

サギの仲間では国内最大の種です。体色は体の上面が青味がかった灰色で、下面は白色味をおびています。首元の長く伸びた飾り羽が特徴的です。干潟近くの林などで集団を作り越冬をします。

内海には単独でやって来て、よく浅瀬で小魚を狙っています。しかし、じっと水面を見つめていることが多く、あまり動きません。

カワウ（カツオドリ目ウ科）

全長約82㎝。全身がほとんど黒色ですが、口元は白く、くちばしのつけ根が黄色いのが特徴です。また、ウの特徴として、くちばしの先はかぎ状で、足には水かきがあります。エサとなる魚を水中に潜って、捕食します。この潜水が非常に得意で30秒以上も水中に潜っていることが可能です。「カワウ」という名前がついていますが、川や湖沼だけでなく、海辺でもよく見かけます。夜明けには集団でエサを探しに飛び立ちますが、夜は森のねぐらに帰ります。

近年では繁殖地などが全国的に分散したことで、ニュースにもなるように沖縄でも冬にカワウの大群を目にする機会が多くなりました。エサを求めて各地を転々としますが、内海にも周期的に大群で訪れ、魚を捕っていきます。恩納村周辺では特に読谷村の長浜ダムなどで休んでいる姿を見ることができます。

クロツラヘラサギ（ペリカン目トキ科）

この鳥は東アジアのみに生息する野鳥で、全体で5,000羽ほどしか確認されていない世界的な絶滅危惧種です。環境省のレッドデータブックでも絶滅危惧IB類に指定されています。冬になると朝鮮半島などから沖縄や九州に越冬するために訪れます。

名前のとおり、黒い顔の模様とヘラやしゃもじのような形をしたくちばしが特徴の鳥です。全長は75㎝程度と大型です。主なエサは小魚や甲殻類です。くちばしを左右に振りながら、エサを捕まえて食べます。

内海ではこれまでに見かけたことがなかったので、たまたまやって来た可能性が高いですが、潮が引いた浅瀬に特徴的なくちばしを突っ込んでエサを探していました。